

165
3
几洋 2

西洋新書
二編
下



津門
號 103
卷 3

東方
學校



西洋新書第二編卷之下

東京

瓜生政和編集



再說華盛頓の大將ブラドックの死後コンブルフットの地まで引揚居たり又程多くモントラヘルソンへ歸陣ありて
度ユタス子城おての働さ比類多しとて僅ふ二十二才おいて
其年八月ヒルジニヤ國の總大將と命ぜらるる爰お於て
華盛頓ハ弥万ヲお心て用ひ猶佛蘭西勢の攻來るに境界
と固んとヒルジニヤ國の中ウ井ンチエストルとらふ処お陣營と

西洋新書 第二編卷之二

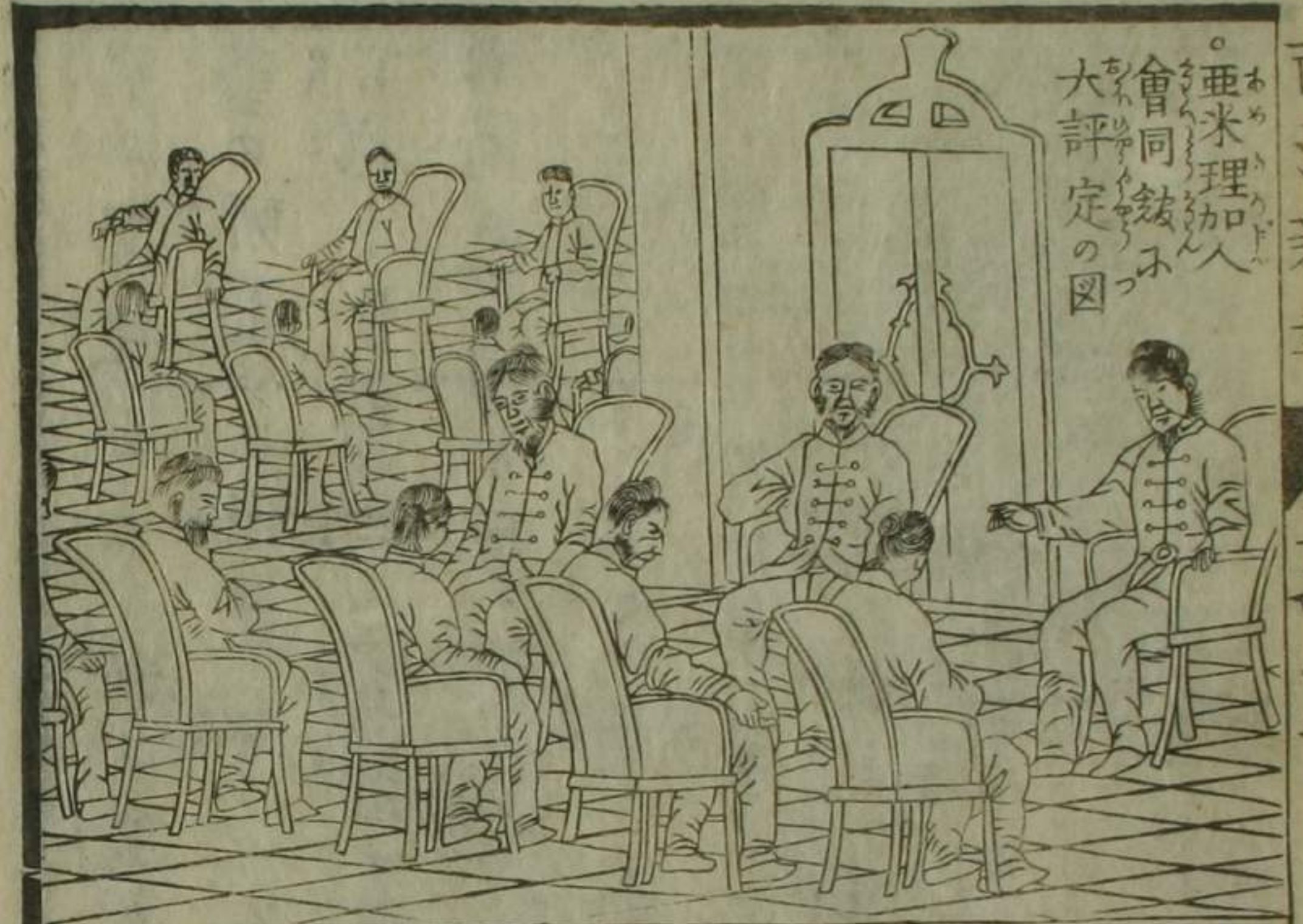
構へ防禦の計策嚴重あり然るに北四辺の土人乱暴を爲し
一更に政令に従ふざる故に華盛頓とて鎮るの策を以
て教度総督へ建白し、とて用ひらるるに一人治國の
法と旅行せんとするに隊下の人数僅三百に過ぎず敵國
との界の長さ百五六十里の間を防禦するに流石大智の華盛
頓も術計尽てぞ見えたり斯て千七百五十七年今より
百二十五年前の九月にマジョル官のゴランビと名する者彼の「ジュケ
ス子城」と一襲ひ襲ひたるに度も英の軍勢敗北し、故
に「ジュケス子城」の仏蘭西方威勢いよく廣大にして英國の領
内へあひ、侵入し來りけり、その後、小捨置難しと

年十二月「コロ子ル官」の「スタンウ井キス」と総督と定め「ホルド」
騎兵の頭とかり、華盛頓と先鋒の大將として再度大軍
と發し、「ジュケス子城」へと奔向するに華盛頓へ爰は於て敵地へ
多く間者を入ると、弁候を呀々へ出ると、以て一寸の間も油断あり
き、從兵と怪便し、粧ひせ行軍、實に迅東あるに、早既小
前の年「モ子ラル」ブラドックが敗北あり、古戰場へ來り
りけり、華盛頓へ馬を止め、帳然として是と見るに、小雨、晒
る、骸骨路傍に散乱し、霜と帯る、枯草を、膏血、肥へ
溪水、岩石、咽んで、恰も泣が如く、悲風、樹梢に、叫んで、怨
と訴ふるに、似るに、頻りに哀と催し、來り、晝の、瀾瀾し

居るるが度とそ一挙ふして「ジユケス子城」を落陥「ブラド」ツク」と始りぬ討死の諸卒の怨魂を慰んと心の裡に誓ひて起せば猶一倍の勇氣を増し一人り衆軍に先立ッ敵地の中へ進こ入りし小仏蘭西勢へ「ジユケス子城」を焼拂ひ早る所と退散して一人の敵も有らざりたり然るに華盛頓と初め総勢城中に入ると代り「ジユケス子」と改め「ピット城」と呼び換へ人数二百と止めては処ふぞ籠置るる仏蘭西人の「ジユケス子城」と立去りりる方今北方の軍は仏蘭西勢敗北せしむ是と救ふんとては処と去りりるありとぞ華盛頓はは度の後戦争も及むず敵城と乗り取り取りとむる故あり「エルジニヤ

小婦陳ありり斯て後も兎角英國より渡來の總督鎮臺の所置心小恨はず夫のゝあらず母馬理より数度帰農と言越しけむと終ふ其意小從む職と辞して故郷あり「西磨爾蘭」もぞ帰りりる爰に於て華盛頓は千七百五十八年の春「ユルサキユスチス」とりふ女と娶り妻とありて母「馬理」も孝と尽し農とを勢むるの外他事なかりしが佛人土人の兵乱も自然小止まりて暫時平穩の世とい成りり抑北亞米理加合衆國の十三州はその始め英吉利人移り住み開拓ありり土地もと皆英吉利の所領とあり夫が支配と請居りり「イダ」方今英吉利政府種々苛刻の法と設け收斂すると夥しけむと

。垂米理カ人
會同録カ
大評定の図



國民一同是も堪えず愁訴數度
及ふとりども断然として採
用ひらとぎ因りて千七百七十
四年九月四日「ヒラデルヒヤ小十
三島の村長等も會同て商議
と尽し強て英吉利の政府へ寛
宥ある政事と受んとと歎訴不
及びらるる政府ふてい却て暴
威と逞まらるる後中渡り
と用ひず彼是議論かず於て

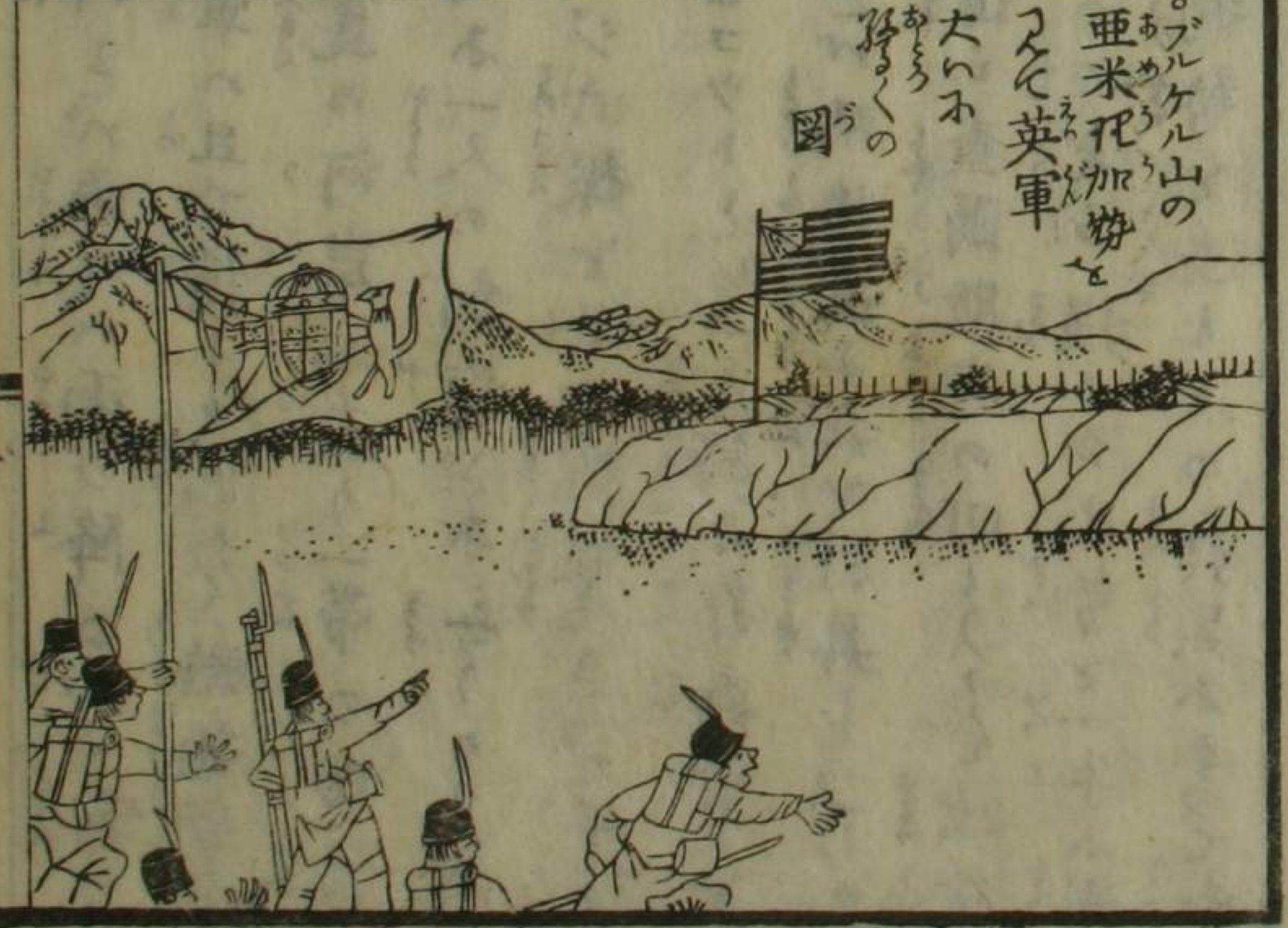
召捕えて罪科小行ふべしとして英吉利政府より陸軍總
督「ゲーシ大軍と率ひて波士頓府に到着せしるる國民一同
大の驚き英吉利の命小背けは戦争不及ぶより外も命
小從ぐべし苛刻と政令を束縛とて今日の活業とち兼るも
至る如何ありて宜しからんやと両議決し難うりしが衆評
終小兵と募り戦争とこそ定りたりと爰も於て竊に「コンコルト
の地へ武器と集め糧食と貯りたるを成りたり然るに英吉
利の將軍「ゲーシハ一万一千五百の兵と率ひ波士頓府に在りて
此企あると聞大隊長「ポータールン小數隊の輕兵と授け「コ
ンコルト討手として走向へり命と奉りて「ポータールンハ

コンコルドの兵器備へらざるうち只一戦ホーテ農兵らと皆尽
 く擒とめん進軍の陣鼓と早め頻う兵士と急ぐ
 ころは時コンコルドへも亜軍あひく集り来る中一隊の郷
 兵レキシントンの地ホ於て計らずも英軍ポーターロールンが勢
 と往合ひこもバ英の大將ポーターロールンの折宜うりと是
 押止め亜人の持たる鑊炮と悉く棄ひ採らんとす亜人の元
 より覚悟の戦争將師もせき小勢とらども恐る気色更
 小あく二を三に押破つてコンコルドへ往んとすと見て英
 將ポーターロールン怒気忽地ホ突上り彼奴ら残らず討取と
 と指揮の言辞も終らぬわ気早き兵卒巢口と揃へ亜人と

目掛け打掛る亜國の兵も取返一双方必死と発炮して暫時
 挑之戦ひとまども亜國の方ハ小勢のう事不念お奔り且指揮
 する隊長さ非ざるに終る敗走するホ及びコンコルドさいて逃
 走る英軍へ勝ふホドコンコルドとも破らんと後と慕ひて追
 蒐来るは時コンコルドあひレキシントンホ於て味方英兵と出合
 ひ難戦のすり聞えけまバ早く應援せんと急ぎ整列する処へ
 忽地敗軍の兵逃来まバ直ちホコンコルドよりワルレンと大將と
 きて打て出で半途ホ英軍の兵と迎へ激戦するを頗る勇猛
 ありらまバ英軍とまホ遮ぎられ先鋒矢庭ホ追戻さまところ
 爰ホ於て英吉利方の後陣の大勢援ひ来りコンコルドのわ兵

らと追つ返しつ血戦数刻ふ及んごり以時諸方の寺院ふ合
 圖の鐘と撞鳴し遠近の村々より逸雄者の農民ら我めくと
 峇械と携え走集ると数百あれども日既小暮ふ及んごれば
 英亜の両軍相互ひ小兵を收めて退ぞさごり然とべ以レキシント
 ンと軍の手始めに日々夜々ふ兵と雜へ小迫合して止時あり
 爰ふまごり麻笏中あるブンケル山へ波士頓の傍小在りて府中
 と眼下ふ見下せば敵の心の附ごりうち早ごり地と取り切りて
 「波士頓府小屯集ありごり英吉利勢と追拂えんと亞軍の
 大将「不列士格副將「ワルンと共ふ千人余りの兵士を引具
 一六月十六日の夜風涼しく雲晴て満月皎々たる小乗ド

竊にブンケル山小攀登り二十二
 間四方ふりて高さ四尺の野堡
 と築きて既小黎明んとあると
 の大畧成然ありごりなり明れば
 十七日昇る朝日の耀く陰小英
 軍始めて是と見出し警き果
 と狼狽ると大方あらずブンケ
 ル山と相對しごり「コツベル山の
 破臺湊の軍艦まごり其処被
 処へ新小大砲と居えブンケル



西海軍書 二卷 五

山の亜兵と目かけ隙間を打掛とバ飛丸の雨の降る如く霰の
 多走うふ似たりとども亜軍の且て憶する色あり猶操作し
 て十二字の頃おの野堡より麓の河岸お亘り一帯の胸壁
 と築立らるが不思議おもけ時お一人の創傷がふせりり然
 とバ「波士頓府より総督「ゲージ」の様と見て弥敬馬き「ゼ子」ラ
 アル官の「ホウ」とりふ大将又「ピコット」とりふ大将お精兵二千と
 授けつ「ブシケル山」と討せけとバ兩將直お兵と引具「ブシケ
 ル山の麓ある川と渡して押し進み查爾斯府の町より一を攻登
 らんとぬ「」る時查爾斯府のやゑら僅うか小勢と一手お備
 え大浪の押來るが如き英吉利勢と選り止め真黒おあつて打

りる英軍是を見るより押取巻て討取らんと双方必死お戦
 ひより「」が暫時おして查爾斯府勢の山上より引上り
 爰お於て英吉利人ら府中の民家へ火と放ち勇威と四方
 お示し「」るまの黒煙りの立と見るより亞米理加方お「」ゼ子ラ
 アル官の「ホメロイ」又「」ユイトナムおど云る勇將其処彼処より
 兵と集め「ブシケル山」の應援として駈付來とバ亞國の總
 勢一千五百お及びたり英吉利方お是と聞て猶おひくお
 兵と操出し既おして三千餘人「ブシケル山」へ攻めり攻めりお
 兵と進めて發炮するを頻りるまども亞軍の總督「不列士」格へ
 諸軍勢お令と下し「」更お一炮の替へもぬさず沈黙りかへて扣え

より英軍へ攻迫り今ハ間僅ク成りけしとバ「不列士格時
分宜」と一声令と下すと相圖不胸壁の陰に潜る軍兵
一時不發炮をたまに弾丸を打倒さし或ひ死し或ひは
つき只一声の音の下に筆と乱して見えたり然とも英
軍剛にして死骸を飛越え躍り進まんとする矢頃と
待ちまると一声不亞軍より大隊打す飛丸の為不打斃れ
打斃さし死者数と知らず然とも英將「ホウが備しとる
勇猛ありと雖も彼方小乱と此方小散り顔と突て追落さ
より英の副將「コソットハ是と見るより救ひ来り「ホウが人数
不入れ代り討こさども疵付ども瘞まらず去ず攻上り劇戦

すも数刻お及ぶ亞軍ハ彈藥乏しけしとバ初めより空発せす
敵を引付こして手誥お成まで打ざりけしども斯く劇
に戦争の終お火包と打尽し今ハ一発の彈藥もあらず成
りより爰お於て總督「不列士格ハ打掛け来る英軍の玉込
の間と見濟し我お続けと言捨て銃鎗と打振り英の備へ
飛で掛る副將「コレン是と見るより大将「不列士格と躍り越
勢ひ込んたる英軍の隊伍の中へ踊り入って明晃々たる銃鎗林
のへ四角八面お扣きまらん爰お於て亞軍の兵卒たる大将と
討すると呼まると鏃炮と手小手お振つて薙り切り或ひハ
左右へ突まらん「號喚んで戦ふより英の兵士の編小炮戦と



ワルレンの討死の図

のこ思ひ一不案の外多々元の
撃戦必死の亞兵小難立ちと叩
き立ちと度と失ひ狼狽周章
隊伍と乱して逃迷ふは向ふ
亞將不列士格ハ早く総軍と
引ましめ血路と突いて去らんと
乃ち小英軍再度取て返一後
と慕つて追まんとす亞軍の副
將ハワルレンハ遙後陣小引下り
一人殿一々追うけ来る英軍

と朱不添たる銃鎗と猶打ありて攻戦ハ再三再四追戻せど終
小多勢小株圃も乱炮不當りて討死するハ惜こても
アある天晴を双の勇將あり然ればはる小亞米理加勢ハチ
ヤルレストンの地まで引揚げけは処の若小楯籠る英吉利勢も今ハ
オヤ大いオ疲と追討す擬勢の抜一も道理ありあは日
戦争英人の討死千員千余入亞軍の討死も員或ハ傳虜
とあり一もの四百五十人とぞ聞えらる案下再説「ヘルジニヤ国の
會同館ハ十三羽の名代役う打集りて評議多英國と
戦争一英國の束縛と放れけ国と獨立不羈とめんハ
全軍の大元師と尊まひ頼む人をしてハ必勝の利あるべくらび

誰と以てう 總督をらんと 評議區ありりるが 折々一 華盛頓の
 「リチモントの地」ありて 農をと募り 彈藥器械も少く 備
 えずりりりり何れの敵とや 追退せけん 何との味方や 救りん
 と未だ決定ぬざる 折々一「ヒルジニヤ」の 會同館へ 使節を
 以て 招待せられ 衆指の 指す處 衆目の 視るところ 終に 華
 盛頓を 押へ 大元師と 定めりる 華盛頓へ 固く 辞まると 元人
 敢て 老を 宥さる 千七百七十五年 今より 九十七年 かの 六月十五
 日 全心の 重任を 委ねりる 深く 感激の 高き 粉骨 碎る
 一々 必家の 為に 報いんと せむひりる 然るに 元師の 捧金 月々 五百元
 程と 定めりる 華盛頓と して 信ず 今元人の 為に 必家の 大利と 立

んとす 豈一身と 利せんや 諸事の入用 帳本 始め 差出せば
 夫丈と 拂ひぬると 言ふと あり 華盛頓が 松慾を 以て
 知るべし 儲りて 華盛頓の 附屬の 大將ハレイといふ 者ま
 「スキユレル」といふ 人と 初めとして 総て 十二人と ぞ 撰み 拳り
 爰に 於て 大元帥 華盛頓の 會同館 において 十三人の 名代 役十
 二人の 大將らと 一波士頓 府の 英吉利 軍と 討退んと 評議 決
 定あり けし 巴レイ「スキユレル」の 兩將を 止め 諸軍 勢と 引率
 して 直に 曰ラデルヒヤ 府と 進発あり 陣鼓 小道と 急がせて
 行り 未だ 十里 ありぬ 一昨 十七日「ブレケル」山 において 味方 敗走
 あり 一子ヤルストを 引揚り 聞え 注進の 急脚 追々

来りけとハ華盛頓へ愁然として「ワルレング討死と悔
大息ありて止まさりなるが弥兵と急がして焦が如き炎暑と
押切り七月二日の七字ころ「廣理理若の地おど著るる所より
「波士頓までハ其間僅々あるとど由英軍ハ一万一千五百亞軍ハ
ケル山より「チャルストンへ引揚るる「不列士格グ兵と雜へて二万
四千然ととも皆今参りの農兵戦争おあるとず加之彈藥
乏しく一人ハ九発の火包と配り與あるのこあり其内ハ
只一隊「ロイデアイランドの地の「ダレング率ひ一兵卒の之進
退自在の働きありておろく英軍ハ劣らざるハ全く「ダレング
仕込の宜しきおて「ダレングといふ人の破銀治と活業とする者の

子ありがけり件起らんとするお至り忽地父の家業と
打すて一途お武藝の道と學び遂お一隊の将帥とありて
爰お出張ありたりま「コンチチコット國の「ポット子ムと
いふ人の畑と耕し居る時馬上の者「レキシントンおて戦争初
りしと觸走ると聞と整しく直ちお農具と投ち馬お跨り
一さんお「コンコルドの陣營へ馳付たる一個の英雄あり然とい先
「コツキスポリイといふ処へ城砦と設けて「ポット子ムと以て是と
守らせ総軍勢ハ「メスタック川の傍りより「ドルセストルといふ
地まで六里の間お陣取るとど先お言ふとどくの貧軍ある故
猶「波士頓の英兵と攻撃んる難けとハ華盛頓ハ心あらずも

西洋新書 二編之二

時と俟て居りける亞国の軍勢斯の如く軍用の乏しき英吉利政府の取立厳しく困苦堪え難らる極め小至り俄小を奪せしめ兵器彈藥と貯あるの暇なく元より植民の地あるに僅小土人の害を防ぐの器械ありしところも多ふ英軍小掠め奪はれ諸島の缺乏小苦しむる後小至りても華



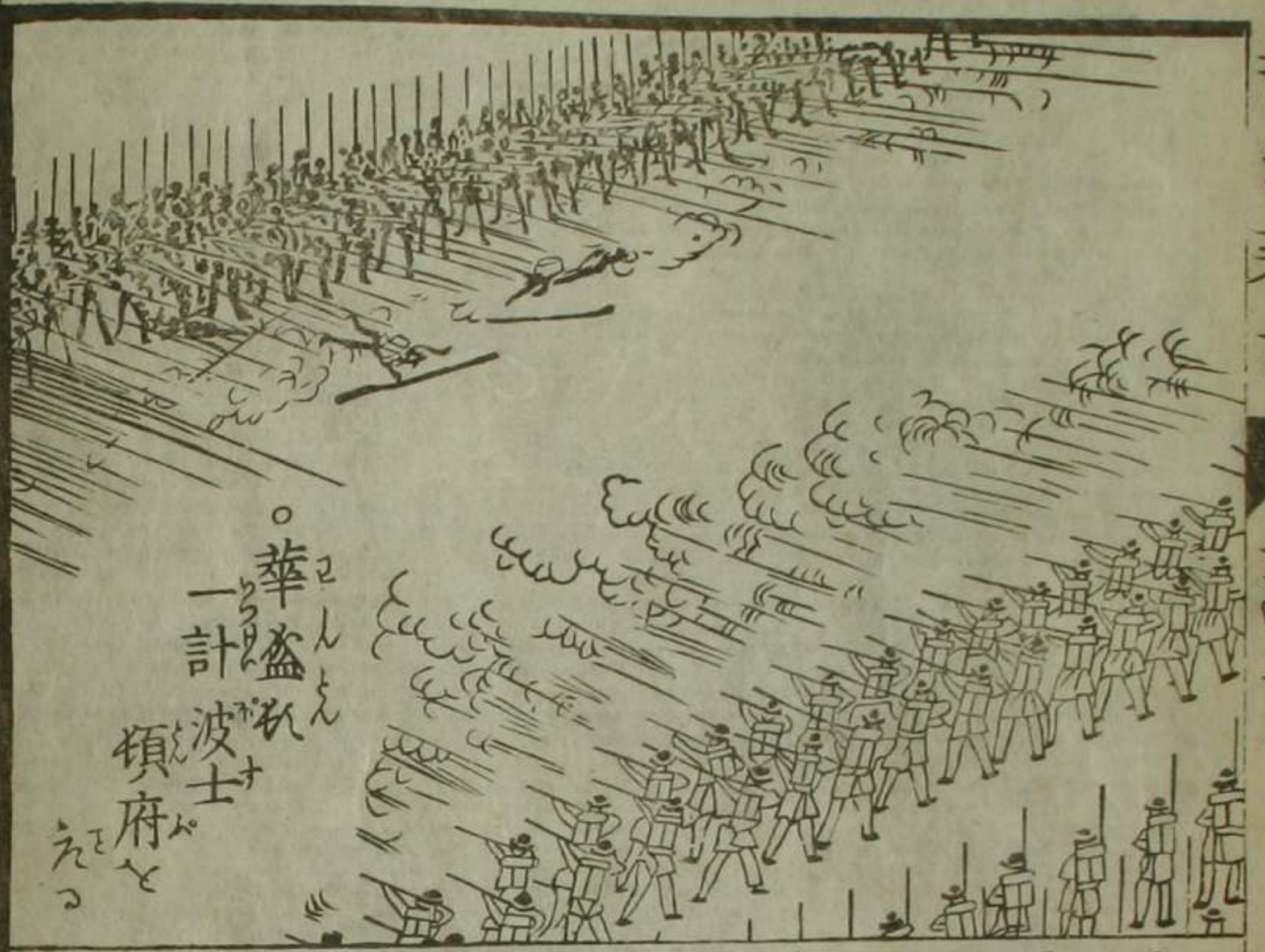
盛頓容易小兵と雜へざるは故ありて以てあるども兵威の屈せん多と恐と秘して味方小も是と知らるるごとく國人却て華盛頓が軍旅小拙多と云て誹謗するものもあろうとある案下再説「波士頓府小へ亞軍大勢押寄せ来り既小間近小陣取りしる由へ大将「ゲージ」て始めとして英軍種々小評浅すまども「アンケル山」の手並小恐とあき悔り難しとして必勝の策ありと待ち只用心と堅固小して白眼合てぞ居りしる華盛頓は眼向小兵卒と仕込んとて日々軍令状と誦聞せり其大意は今般の合戦の銘々の安危存亡小係り實小全国の一大事件あるに努々粗

忽あつてべららず行状の宜いさへ陳中ふても陳外ふても兵士第一の謹之候令些細の事とらへども隊長の指揮と請けて為すべきありあど総て作法と正候一次第不武道不導きたり斯てもく華盛頓一計と廻ら一竊不大将「スキユル」として「チコンデロガ」とりふ処の城と乗り取らせ「アルノルド」とりふ者命ドて「加拿他」の「ケベック」とりふ城と攻取ら「むじ」とり英吉利方ふ「メイ子」の「ワルモウト」とりふ地と焼討かとして墓と名軍もせ候白眼あひてぞ居たりり然る不亞米理加の兵卒へ其初め斯限と定めたる農兵あれはけ年の暮ふ至り斯限尽ことも今新兵と募るの折せつ練磨

の軍卒と帰村さするに能はず故不斯限と延して是と陣中不せんとみる不借金乏しく給料の配分も不任せざる不因て命不従ふもの少一不敵と前不不え教練せ一兵と解て新の農兵と用りんとみる華盛頓が胸中如何あらん不時華盛頓が朋友不贈り一書あり其文中不曰「君不問ん世不ある歴史と読て何きの編ふ我今日のこま不均しき條ありや六ヶ月の間弾薬の儲乏し一不列顛の精兵と對陣一敢て一足も下らず加之援兵日々不重る大敵の眼前不在て練兵と解散一新兵と募り一と云く」嗚呼道理あるを華盛頓が言辞古代歴史中らま不此

以べき事條絶てあるを、斯て其年暮て明とハ千七百
 七十六年今より九十六年かの正月英の総督「ゲージ」副
 將「ホウ」と評議あり我熟華盛頓が軍と見るに陣列嚴
 然として容易に破りがごとく故に數隊の兵と引て竊に
 垂人が心服と恃むに「新紐約」の地と攻取らば華盛頓が兵
 隊ハ戦ハずして崩るべし是必勝の策ありとせずとて終に
 「波士頓」府への副將「ホウ」と止め置大將「デーシ」の數艘の船と
 用意あり「新紐約」の地と攻取らんと竊に進發ありとあり
 華盛頓へ英船多く「波士頓」府と出帆せしと見えかあり
 ず「新紐約」府へ兵と向いあらんと察し大將「デーシ」命じて

「コン」子チコットへ赴き彼の地の軍勢と催り急ぎ「新紐約」
 府と固むべしとを告ぐに「デーシ」は時弾薬少きを懸念しけり
 今ハ空軍多きがごとく早く「波士頓」府と改取らば「南」
 「波士頓」府より「ドル」チユストルハ地形高く且諸方への通路と
 塞がせて「波士頓」府と攻むの要地ありと先け地と占んと評議
 一決せしに「バンケル」山戦争の後英軍「查爾斯」府に陣營と
 構へ再び「バンケル」山と取らんとざる用心嚴重ありけり
 先「查爾斯」府の敵陣へ夜討を仕掛け大いに英軍と劫り
 「バンケル」山と取らんとするの威勢を示しおき千七百七十六年
 三月二日英軍の人殺し一内を砲弾丸と打撲し「波士頓」



府を攻撃し兩日第三日第四日の
宵に殊更劇しく攻めて奈炮す
るに隙向をまき英の大將「ホウ
華盛頓ら奇兵を以てけ処を攻
せ然して正兵を出し今宵再々
びアンケル山を攻取らんとの救計
からんと推察しけまは猶アン
ケル山へ兵を送り「查爾斯府
と固りまはるるに嚴重ありは時
すに華盛頓宵の砲声筒煙り

の紛れおしモ子ラル官の「トマスとりふ者お八百の兵卒と一千二
百の土工兵と授け竊くお「ドルセストルの高地を取きし世曉天
お至るまじお「帯の胸壁を築立しり明まは五日の黎明お英
軍初めて是と足出しり「如何おアンケル山と思ひの外「ドル
セストルの丘の上へ一月も掛らぬバ仕課せざるお玉除土手と
僅一夜お築立しりとして英將「ホウハ出り拔きしる臍を嚙し
驚愕すして大方おらず然まは要地を取切られ其後おまは
止むべき成らぬバ直お精兵二千と勝り船手よりして向かせ
しととも烈風おしりり「能はず因りて又夜討を為んと
企てしととも其計策も行いえず術計殆ど尽果るお至り今

以処小長居せハ総軍尽ク亜人の俘虏と成らん如ク「波士頓」
府と除去ん小ハと集議決着あり同年十七日総軍残らず
夜小乗ド数艘の船小取り乗りて我先小とぞ落せりる亜米
理加勢ハ英吉利の敗兵ガ「波士頓」府の人家へ火を放さんぞ恐
ろ小より敢て是と追付せん「トルセストル」の高地より入物色
居り「波士頓」騒動漸く後をけきハ「華盛頓」ガ分隊の大將
「ボット」子ム一隊の兵と引て先「波士頓」の町へ入り翌日大元帥
「華盛頓」総軍と引率「波士頓」府内へ探込にけきハ都下の人
民英軍のぬ小十四ヶ月の間苦「めら」ま殆ど飢渴小及ぶの時
あまハ大旱小雨を得「喜び」歡声街衢小滿々て万歳とこそ

祝「さ」りけぬ
「華盛頓」軍陣小大總督と「英國」の束縛と断切合衆
國と「獨立」不羈とありまぐの戦争事長くとる
容易小海も果さまハ爰小暫時筆と止め差當り
る物産の一二と出「て」僅々小記
○合衆國産物の説
合衆國始めハ「金礦」山乏「く」て「金銀」を「拂底」あり「ガ」
中古小至り「北駕羅連」及「南駕羅連」及「瑛治亞」典「尼西」
亞「刺羅麻」等の地小「金山」の多くありと見出「し」千八百
八年今より六十四年お小掘出すところの金猶僅々小五

千員と過ず翌年不至り一万七千員と掘出—三年めふの二万員と掘出—四年めふの二万一千員と掘出—五年めふの四万六千員と掘出—六年めふの十四万員と掘出—七年めふの四十万六千員と掘出—八年めふの五十二万員と掘出—九年めふの六十七万八千員と掘出—十年めふ八十六万八千員と掘出—十一年めふの八十九万八千員と掘出せ—とあり然るも千八百四十九年今より二十三年前の「東方西斯科の地の金山と見出し一年と掘出し—と云ふの金山高三千万両銀も准じて産出する故世界を双の金礦山と爲す金坑の有山の長さ百五十里幅二十里と云ふ



「東方西斯科の説い既初編小詳あり是合しと知る—
銀銅かよび水銀の類の土地よりて産すると維も狭くはつて
多く所と—てありざるは多く錫寶玉の産と稀あり又樹
木は何この土地も繁茂あり石炭の辺西耳文の地より出
至つて品宜く且沢山もあるをとも始めの土地廣く是れ人
民少あり—故小薪とのこ焚て石炭を用ひさる—が中古

不至り石炭と採り用ゆるて夥しき小因り人家日夜小多
 くあるとも樹木の茂りたる以前小衰うところ
 鹽へ諸方の海辺にて製し且ま山中小塩の出来る池及び
 鹵石もどありて是れも塩と製り又油の気ある水
 の涌山あり其水と採り葉を以て燈火油とあり食物へも
 入して煮るあり産物中の奇品と云ふべし
 金銀銅鉄石炭等の何れの國小ても多し私小取るとと嚴しき
 法度と為さども合衆國小てい誰小ても構はず勝手次第小
 採らするあり故小他國人と雖も合衆國小来り金と採ると
 と活計と一して暮す者の甚ど多し乘方西斯哥の條と

て知るべし
 樹木の大小百三十餘種ありて其丈々高さのい三丈餘小あり
 椽木の折節小ハ八九丈小及ぶあり是と用ひて船と作り橋
 とめす小最より其木の種類四十四あるあり核挑もまて種
 類十あり楓樹の高大小して繁茂なるもの多く其樹の
 液汁甘けとべ是と煮て砂糖と作る小毎年二万石も取る
 べし美蘇里島の地小楓樹の大株あり圍り四丈六尺小及
 ぶ又樺樹の大木あり最壯觀と多し其木の皮と取りて屋
 根とふさ或いは船小作つて河と渡る小輕便小して迅速
 多し土人の出入り小け船と背小負ひ途中小河あり

是と浮べて液るあり初て草木の類亦ハ魚教鳥るおと
他おあるるの大方のあり只多きと少きとの差別と異
あまらる而已

合衆も因け始り知もそ織もそ工職の業も疎ら
りけは人の力ありても本とるべき物も人の力も本とる
べき物もあつても是と製はとて知識る者もそ故相と拵
らへると何お因らば六ヶ変らうが中性若うりの然らばそ
物もそ是と製するをそ知る人おけきば他もより知る者
と拵きてお人お習へり又製するをそ知る人おそるても
手おをそい他もより採寄て我池お移り是と製する

みと知り是と製する物在りても人の力足らざるは水の
力火の力獣の力と借りて製作するあり所謂蒸気
機関水車牛お耕させ馬お車引するの類あり合衆國の
南の國々の棉花至つて少く矢張日本の物の如く一車お
て紡ご一機お織りて故其出来あがり遅けさば棉の價
高直ありしが國人の知識日々お用け月々お發明して千
八百十四年今より五十八年おど前お至りては何もこの場呀
おの糸車数十と双べ置て棉と紡績お人の力と用ひ
ば蒸気の機関と借ては数十の車と運轉しお只一人の少女
ありて世話するあり布と織るも矢張蒸気の機関と用ひて

数十の機と搏旋一人の少女是と世作るもの或る所の機織場小紡花車一万五千と架布と織出す日々小千五百反小至り是と扱ふ者八百人の内男百人女七百小一て女一人小付毎月の給金十元より二十元小及ぶ其内小番頭役一人小るるる物品の出入り買賣の事と司る小者の給金毎年三千元あり別小まゝ八百人の者の頭役一人あり其者の給金の毎年二千元あり然して織元の主の儲けとする所の総高の十分の一あるのこゆを其頃小至り布の價日と追て下落小及べり十七百八十四年今より八十八年おのころの年々小産する棉花三万八千小あり一も千八百

十二年今より六十年おの頃小砂糖至りてい棉花多しと雖も二万七千小過ず估價へ二千七百万元あり
 此頃の元の相場日本の金小直して何程小當るや知と難し故小元書のまゝと記す
 此品物の五分の一と曲めをて我國の用とを五分の四と以て他國へ賣捌る其翌年の頃



畑の真図

より近來まで棉花日々増して是と二十年以前の價
小比較せば三分の二減ざると雖も當時の高とある者ハ二
十年以前より却て多き利潤と得る故布と織出は
日増し月小益んるる是より前ハ多く苧蘿布と用ひ
〜〜ガ棉花益ん小成しより苧蘿ハ漸々小衰へ往
〜

羅紗ハ羊の毛と資り用ひ故小羊と牧ふ者も亦多
羅紗と織出すハ英吉利と以て創めとあり合衆國人ハ
是小效ひ一ある故始めの程ハ英吉利の精密あるハ
及バ〜ガ苧蘿機関ハ〜と〜と〜と織出は〜大

小巧と小して更ハ英國小讓らず方今小至りてハ盛ん小各國
へ賣捌の多き小至り今も玆機械と用ひすも織小者
る羅紗も多きとモ是ハ家内の者の着料小用ひ他へ出
て賣捌く多ハ故さるあり

磁器の如きハ國內小其焼ところの土沢山小ありととも日本
支那あどの物小比較てハ品柄遙小劣るあり是ハ諸器と
も小金属硝子等小製する多と専ら小する故自ら陶
器の方へ持への届らぬ成べし

書物ハ正板と用ひハ皆活字の活板小して紙の製法
文字鑄立方と〜都て密あり書籍ハ何と〜小不〜



沢山に出来るとど方今に至り
ては是と指出ひの多き當國
の「新紐約」と以て世界第一と
稱すべし
千八百五十年今より二十三年
前の頃ふは合衆國にて一年の
交易する金高二億六千二百
万フランクスにして其船積
で往來する荷物の量目へ二百
八十九万五千二百十八噸を積

と云ふに當今に至りては猶三四倍も及ぶべし合衆國開け
始より一より未だ茲に程も非ざるふ盛んなるるに於ての如し

看官宜しく推知あるべし

國産の物品金銀の出入等ハ瑣々として見るに倦む多し

且バ暫時後集へ譲りてを既前編に書記せし

皇國より去るに亞國へ航せし其入々の見聞と挙て是より

解出すべし

閏三月六日巴那麻へ包巴丹船より上りたる 皇國の人々の

巴那麻より蒸気車にて「アスロンウアル」に至り「アスロンウラ

ル」より直不端船にて一里半ほどを渡りて「ロー」

一クし号けらる大船へ移り夫より新紐約まで出帆を
しる

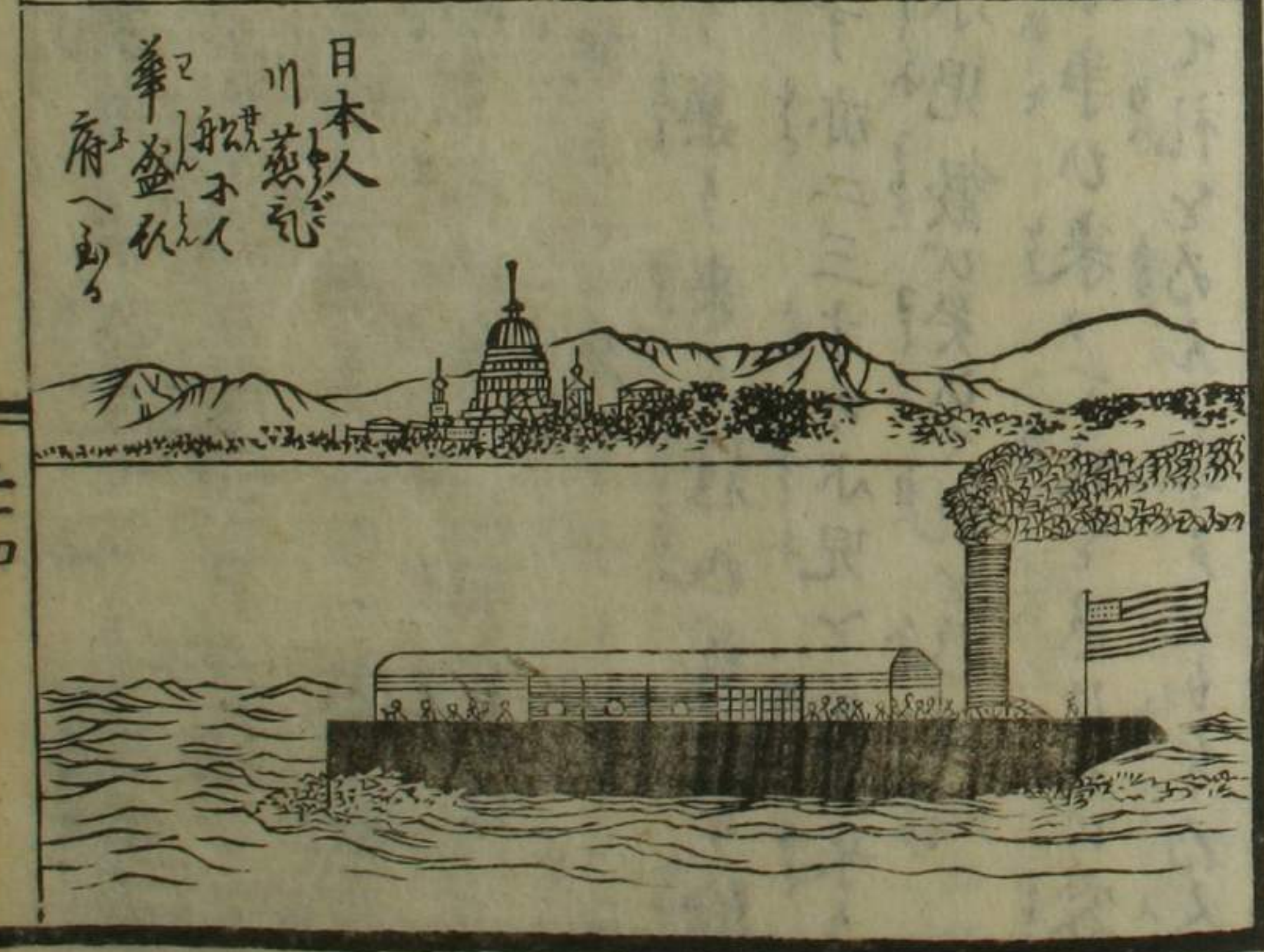
「アスボンウアル」辺の海中に生ずる水草に「アイブリナツト」と号けらる実と結へる物あり其大ささ鞠の如し其実を以て畜獣の形其外種々の細工とありす色白くして実の美麗あり亦「アマナ」と言ふ木の實あり色赤く形体柿に似て味ハ甘く甘くは実の種を以て指輪と作る色黒塗の如くふして亦美しく
斯て「ローノーク」船ハ廿三日の夜に入らう「ハムトンローク」と云
淡へ着岸し廿四日小河蒸乳船へ乗移り是より河と

廻漕り往ありは船中にて氷と色々不凍種々の形あり
製しる物と食す味ハ甘く口中へ入る不忽地消て至
極美味あり是と「アイスクリン」といふとぞ

は「アイスクリン」と製しる氷と湯おし解し其氷を種
種の色あり物の形体の形へ次ぎ込し然して再度氷
の間へ入ると忽地元の氷と成るあり但し生鶏卵の
白身とハとぎまき氷らぎるのみ氷ハ器械にて氷ら
るる物ふて一兩年は方盛るの頃ハ東京横濱など不
も器械にて製しる氷と賣歩り其の性もよく入る
申の刻「アールハイカンボウ」といふ地の臺場の下へ碇と下

上陸して見物ありせし小倉場のうち五町四方の
 地へ大砲四百六十八挺備へると大地へ積上げること天山の
 如く倉場の内外小人家百軒余あり是の倉場結の人の
 役宅のよみて家族も爰に居住なり一人彼の小
 の者小向よて倉場の内小女小供あどる居る戦争の時
 の足手纏ひと成る小非ぢやと云ひけし彼の小の者答
 へて戦争の折から夫の軍中へ出て働を妻の家ふる人
 糧を送ると汲とる夫若し付死まらぬ妻も且と
 月而小あうて死まると規則とせると云ひし実小然るや
 否やへ知らば初く一ホートメントと云ふ川と遡洄り性上

十里をうりふして左の方へマウ
 トヲヘルンと云ふ所ありは辺風景
 ろつとも美し初代大統領華盛
 頓の隠居せし地と云ふ爰より
 華盛頓府まで八里半の道
 程あり二十五日十字より船に華
 盛頓へ着しけしと直上陸ぬ
 各出迎ひの馬車小乗り旅
 亭へ往り其道すの警
 衛嚴重ふして歩卒に銃を持



万葉行書 二編之二

二四

騎兵へ劔と携えまゝ樂と奏するものありて何れも二羽小
 列一惣勢二千餘り整々とて隊伍と礼さばり容りつ
 とも嚴重ありけ日日本人並に上陸するの由と聞き數万
 の男女馬車小乗り馬小跨り木小登り石垣小取はいて
 見物するに夥まゝ日本人の乗りこる馬車少しあても止る
 りありといふ人左右より寄り集り来り冠お我採り除
 手と握り一人といふ礼とあす亦二三才の小兒と抱き来り
 日本人の手と採らりいひる小兒歡び笑ひて礼とあは或ひは
 七八才より十の六才の童子争ひ来つて礼とあは其の容
 最愛まぐ一思人もまゝ来つて礼とあんとすまじも亦お人

是小手と出すものあり老人足弱の人をい遠く離して見物
 すととい冠物と脱ぎて礼とあは女の多く五重六重の
 高樓の窓ふらりて白き布或ひは我朝の日の丸の旗と
 造りまゝとい米理堅の印の旗と左右小振つて礼とあす
 と門並あり往て一里斗りありて旅館小至る旅館の門前
 小の兵卒百人やど銃と肩小して固め館舎小は日の丸の大
 旗と建つて途中護衛の人数いけ処小く列とあえ猶衆
 と奏しあがら引退く

旅館中の模様へ前小記しといふ爰小贅せず
 本日日本人午の刻小萃盛頓府へ上陸するてと兼て新聞

誌ふ記し賣歩行しふよりて百里二百里のおき千里外の
 遠き事も事とせず来りて足物做しる故おその人恰雲霞
 の如し然ととも皆火輪車に乗る走りするまの千里の
 遠きも我國の二十里外より来るより手軽く一日一夜おして着す
 ると言ひ然とへ日既暮んと為とも見物人猶旅館と
 取圍に群集するを大方からず本朝人二階三階の窓より
 是と見て百文錢四文錢をどと投下しるお衆人狼狽て争
 ひ拾ひ混雜するを沸が如し是は日本錢の除らしごと故
 りとぞ斯の体るまの旅館の内外ともお足物の人群集
 弥増して宿屋の中お居てさへ我朝人の廊下へ出ると待て

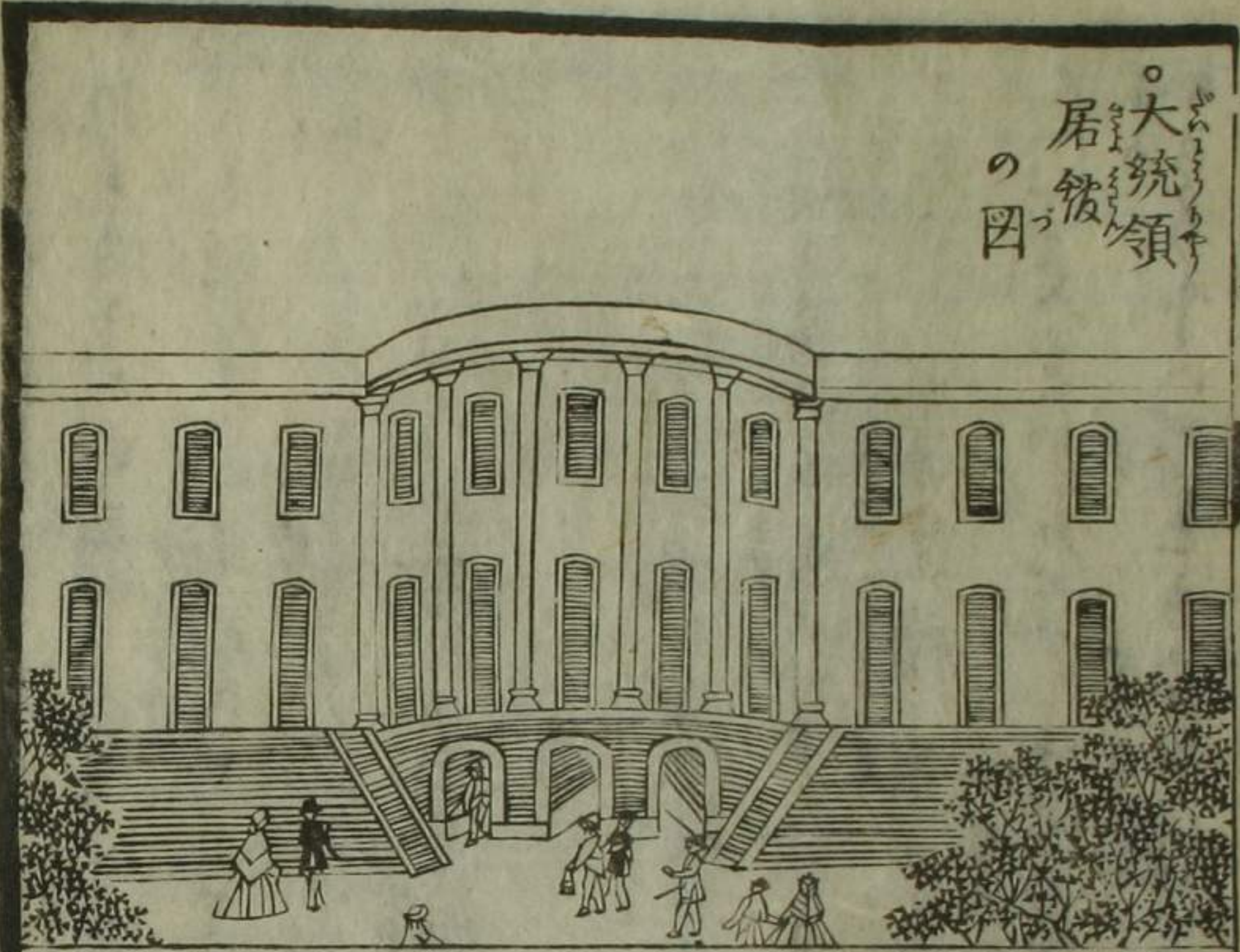
大勢忽地群り来り我も我もと出は故是非かく此方
 中と出せば取代り引代り中と扱らんれと為は小どお後
 左右と取囲まは容易小一步もをまはさば往來殆不自由小
 く是は同一同種小及べり日本と人若去てより旅館の中へ
 猥りお人の入ると件さば何れも彼人の家内の者或は
 旅館の主人の親敷を外格別の手続をある者お非ざると
 来らぬぬるよりまの日若き女六人おは客人の手と採り
 先小を業内なるゆゑ更さ候小階子と登り終小八階目の一
 番高き座敷へお入りしとるより四方と望むお市中町の往來
 より遙りのを方まは一日お足後一更なる夜送り寄木の

桂色珠あるの毎彩規小志は風糸を碎小尽し難し何ほどの
家も萩根の上の白き小石と交るる下下三寸ほどの厚
さの洞の延板と以て張らんとす

廿七日舟船人の荷物と取より揚る小可子と云ふ十歳斗り
の童子在りて十貫目余の多根の入り包として最長がさく
持しる多人数と云ふ是れハ童子ハハ掃る力ありと誉けきを
傍小居る手巾も是と持しき手輕しは根ハ十六歳
小く色白く熱英ハ姿の優しきハ似合バ水根の包その
重きと持しハ実ハ寄方うと云ひハハ月一年ごうの根
ありて四人とも小毛と持し更ハ甲乙あると云ふ右の乙女

ハ何とも十ハ六歳あると十貫目余の重き根持と云ふ
以て手輕けき各感心ありさる方を昨ハ童子の舟船人
ハ誉らとと羨ましく思ひて乙女らも持し容子ハ急
是とも大いハ称讚しけき皆歡びの色をえと夜ハ入り
旅籠ハ旅籠と云ふと云ふ
廿八日舟船人王城へある途中の警備上陸の内のぬく小く
音楽と奏する者の四十人あるりハ時辰の傍らハ在り
て日本人と字書鏡へ字ありありのありハ王城の
大門と入るハハカビテレン及案内と為す玄關の側ハ扣え
取らり下ハ何とも花毛種と交つるハ向ハハ種々の草花

大統領
居候
の図



と飾り爰より巾五層ほどの
大なる廊下と社と三十層余小
まゝ両側きの大戸ありは扉を
左右へ開けば一段高き所あり
て大統領并手婦人とも小曲
祿小掛りて在り下段に
事務宰相と指ありて大
統領の方小の男をうり婦人の
方小の女をうり合し六十余
人列と正しと並居たり何れも

装束へ常と変るるを
逢の礼をりて引退く城中小の要害の所をなく警言の
人殺むたり実小以て案外あり夫より英吉利仏蘭西魯
西亜和蘭等のハミンストルの彼を廻り夕刻におむり及彼に
當大統領の極二人あり妹ハ二十三才ありて亞米理加
乃第一の英婦人と秘に才智あり万人小務は中
事務の多くは婦人の物中より出るを後と云へ
姉妹ともお未だ夫と持て英小の女王小も務は
勇婦とては兄弟の呼最あり妹の名を「レエン」と
ふとて

廿九日事 務宰相の家へ使女教百人伏集めて踊り
七階の大いふ食應ありて万々小美麗と云ふ
日本人と云ふ扱ふと云ふ重く旅亭の内の廊下の隅と表
の間の入り口等ありて兵二人づいて夜中と雖ども
信度守まり部屋とへ毎々下女二人づいて来りて掃除
と云ふあり

晦日午の刻に旅館より一町ほど隔りし所に出火あり
早半鐘と云ふ鳴らし火消人は一組と云ふ龍吐水階
子の数と積る車と押かき来り消防するの働最
手怪し水と汲み失張「ポンプ」を用ひ

「ポンプ」は以太利測の中ある多加納國の首都佛稜の地
理学究理学の大先生「ガリレ」といふ人の發明にして空
気の壓力と以て水と揚るの道具あり我朝の竜吐水或いは
子供の翫弄物の水鉄炮なども皆是空氣の壓力にて水
と走らせ出れりものなりけ水と走らすと空氣のあり
をと言ふと心附るは「ガリレ」を以て始めと云ふ

出火すると云ふは家財道具の捨置て早く門外へ逃出す
と以て專一と云ふ然れども大いなる家小て怪我人
死人多くありと言へり

四月朔日市中と歩るす夜ふ入りて旅館小音楽ありけ
 処至つて廣く豎二十間余横十間をうりふして下へ板敷る
 入り口の上の処小器械と置くの器一人手と動うせむ十人余小
 て奏す音祭の音と奏す其仕掛甚ご大いあり日本人
 椅子と双べて是と聞居るうと物蔭より竊小字書鏡
 と以て字取りとるるとぞ

二日博物館と見物す夜六ツ時ごろより俄小大風吹起
 つて一天墨と流すが如く電光夥しく遠雷ありて雨降り
 来りて皆時ふして空晴る
 三日和蘭一ミンストルの館へ往り小英女婦人と多く集め

て踊りて催し餐應の料理実小善美と尽く酒宴果
 て後結或ひ紙と以て作りたる種々の草花と細や
 入小彩色一足りある菓子と大いある臺小山の如く積
 上ダ其上へ日本と和蘭の旗と建る是もまた菓子小
 て作りたり其趣向最面白

四日夜ふ入り旅館小於て大踊りと催す我國の藝者
 踊り子の類と七八歳より二十三歳までの者と二百
 人余集めたり其拵へ何とも腰より上の素肌ふして白
 さ紋紗の類と肩の処より掛け乳の布と以て包と腰の布より
 白紗の類の物と数十枚重ねて着下ふ提灯骨の板あり

物と附る大袴を履ありけ地の婦人の紅白粉の色へ借
びたる天然の藤色雪より白く玉より鮮明なるもの
実小神仏境の天女も斯やとたけり我人とも小現と
振して見物あり

前小記せ踊りの模様と足合して詳あり

五日「子ビヤールト」へ往け所あり金銀羽狭の細工船の蒸
気の機械大砲其外軍用の具と製造する蒸気機関
の仕掛あり當地ふても都て日本人の市中と散歩
するて待て亞人等争ひて袖と引と採り我人へ伴あり
て酒菓子あじと進め或ひを隣の人と集め入魂小令



日本人
の
歩
の
圖

しゆ名札と乞と頻りあり故小道と往とさひ數十人ふて
左右と取囲と男女とも小争ひ来つて手と出礼とぬ
さんとする小因りて日本人
両手小四人五人の手と握り
過るとあり勝り小大勢あり
と一人の者哉度も来つて
戯むるうと思へば然小非ず
度と採りて礼とぬる
者へ再度来るるを是れ
度日本人は國へ渡来せし

風の吹廻りて時の鐘の聞えざるや雨の日小日差の目印雲
の爲小空くあるかどの憂え有るを

七日旅館より五六町往ふ我國の寺院の松あるところへ至る

は境内廣く家造りもまゝ洪大あり正面の二階へ本堂

の類て説法をどなる席ふやみらん至つて廣くして中央

小高座あり四方の高き所小人間一生の間の苦衆を画

きく額と掛あら下ふい数百の椅子を置たり高座の傍

らふい白き石と以て婦人素肌ふて寐たる姿と人の体

少く大く作りて飾りて左隣の廣間ふい世界の繪

圖まゝ硝子ふて作りたる丸鏡ありは鏡の蔭へ身

と入ると其人の顔四尺四方なり見ゆるあり奥の廣間へ
金銀銅鉄その他諸國の珍石を集めたり其処より一
段下の廣間へりゝゝゝ爰に博物館あり種々の奇
品と集めたり

博物館のすゝゝ既ふお小書紙せむと贅せ

は日未の刻より大雷風雨猛烈にして暗さる闇夜の如

く家内の所々へ燈火を用ゆる程ありが暫時ふりて雷雨

止

九日旅亭の斜向ふより出火始まる最初何とあり騒々

敷人の大声ふてフワヤ〜と呼立るあり何ぞ成らんと

思ふ内半鐘鳴り出火消人数追々駈付来る一軒
焼めて頓て鎮火す

十日亞國のシストル館にてダンシング二百人をり集
り踊り有り摸振前小同ド

十日旅館の中の踊り舞臺へ男女三百人等と打雜り
集りあ後三日の間大酒宴を催す中央の我國の日の

丸の旗と掛左右の米理堅の旗と掛の下に丸人酒
と飲あり是れ日本人をりふけ府へ到着とて祝賀

してありと言り
十二日また雷雨ありけごろ毎夜旅館に於て婦女多く

集り風琴と彈き唄うと踏舞を為す

十三日けいおむりお早きより夕おあるまぐ子儀大勢旅館
の窓下へ群来り日本人の金錢或ひ紙手拭ひ等何小因

らず是を貫をんとして争ひ騒ぎ其五月蠅と更らふ
言語小絶し

十四日遊歩して万國の産物を集め一館へ至る夜小入り
旅亭に於て黒人コペヤナと調べ変声と奏して唄ふ聴

聞の人群集す是れコペヤナの達人の由るとども日本人
の更面白かゞコペヤナの夕へ前小出せり子の刻

過出火あり

十五日我朝人五人馬小乗りて遊歩する小前へ亞國の若き婦人一人馬小乗りて往あり我朝人急げ急ぎ止まりて止まる疾弛とび疾弛りて終小を帰ふ及ぶと能はず此の婦人の馬小乗る小ユミ小一して乗様の左鐙の方へ兩足と出る小腰と掛て馳らすあり馬の肥太りて強けまども陰囊の玉と抜る小因りて至つて柔和あり結を或ひの糸車小用の連錢驄馬最多一

十六日旅館へ字真師来り各の真像と字一れる未の中刻俄小雷雨烈敷来り雹降り出す其大きき三十目の鉄炮玉の如一夜小入りて旅亭小字一画あり

移一繪の事小前小出せば贅せず

十七日夜再度旅亭小写一繪あり天統領是と見物小来る小婦人兩三輩と引連一のに従者一人もあり其手軽さと知る

十八日廿日旅館小食應あり都て滞留中の食物へ酒菓子獸肉魚米飯麥餅茶豆湯鶏卵砂糖牛酪九年母猶余



西洋新書 二編之二

の菓實くだものとてあまじきも 獸肉くわに魚類いさなの塩煮しほ或あるひの油酢あぶらを
ふて味あじと付つきとど塩しほ甘あまけとバあ日本人にほんじんの更さらふ美味うまいとて
尤なほ食た養やうの上うへの塩しほ醬じやう油あぶら酢す油あぶら辛から子こ胡椒こしをどと置あと常つねと
るん

十九日明朝あしたに地ちと出立いふ付つ夜よふ入りて男女おとこ大勢おほい暇ひま乞こ
ふ来きり皆みな落涙らくなみして別わかれと惜あはしむ実情じつじやうの深ふかき以もつてる
るん

二十日旅亭りょていの門前かどより馬車ばしやふ乗のり二十町にじゅうほど行ゆき蒸む
気車きしやと入いる家あふ至いたりけ処ところより蒸気車じやうきしやふ乗のりは
蒸気車じやうきしやハハナマと同断どうだんるまども少すく一ひと大おほく一ひと間ま四十

人ひとと入いる走はるる巴那麻おんあまふ倍かひ一ひと車くるま発はつふ知しりき迅速すみ
ある疾風はやかぜの如ごとく車声くるまこゑをんくといふ作しをせむ忽たち地
北郊きたうふ出でる渺然めうぜんたる平原へいげんを低ひく四方しやう青草せいそうと敷し
るが如ごとくある中なの樹木じゆもくの生茂せいまりる知しるもんえ民家みんか又
け処ところ彼処あつちふ在ありて麥黍あはるどと作しりる畑あはれもあつち
松柏しょうはく櫻おうの物ものもあつちども車疾くるまくして分明めいあらず
既すでに華盛頓府わせいだんぷと去さると数里すうりふしてバルチモール差さ
てぞ進すすむける



第三編だいさんのバルチモール府ふより亜米理加弟第一あめりかだいの都府とふ
新纽约府しんやういふの市中しやうちゆう万事まんじの容ようと仔細しじゆふ挙げ且かつ亜国あこくの



大元帥華盛頓と英皇の大総督「ホルド」ホウとが或
ひの敗つて或ひの勝つて百折千摩の大戦争の武畧の精
粗て具ふ記し彫刻既ふ成りてきまが發兌をきふ有ん
而已



西洋新書二編卷之下 終

西洋新書三号より以後まで指既ふ成續て出版

官許 明治五壬申年中春刻成

瓜生政和編輯  

橋本玉翁正画  

梅村宜和藏梓  

東京
書林

大和屋喜兵衛
發兌

官 許

瓜生政和編輯

西洋新書

二號 全部

東京
書林

寶集堂發兌



